



近代文芸・資料複刻叢書第四集
昭和三十九年六月十日発行

定本 圓朝全集
全十四卷
〈巻の十三〉

限定版 五五〇部 定価千弍百円_二三_〇

校訂編纂者
圓朝會代表者

鈴木 行 三

発行者

松本 富 夫

	版	定	限	
第				

発行所

株式
会社

世界文庫

東京都目黒区原町一、三五五番地

電話 東京七二三局九二四四(代表)
振替 東京七八四九八番

圓朝全集 卷の十三 目次

口 繪

初日、閑居（圓朝自畫賛）
色紙、書簡（圓朝筆）
花咲翁の行列（芳年、年英）
碑及墓碑
粹興奇人傳

いろは短歌見立、番附
圓朝宛名士の書簡（其一、其二）
原本の體裁（二十一種）
直門の主なる人々

本稿 英國女王イリザベス傳……（挿畫 水島爾保布）……………一

落語及一席物……………

ヒトクサリモノ

（挿畫にゆう）
同牛車
世辭屋
玉龜
玉龜

一三

書翰及雜文……………四四九

附 錄

三遊亭圓朝傳……………(信夫恕軒)……………四六七

三遊亭圓朝子の傳……………

序 題 字 芳 川 春 濤
挿 畫 圓 朝 吟 朗 月 散 史

四九五

圓朝遺聞附年譜……………(鈴木古鶴)……………五六九

圓朝雜觀……………(岡鬼太郎)……………六六一

圓朝全集 口繪及各篇解說……………六七七

索 引

主要人名索引
 外題索引

英國女王イリザベス傳

第一回 發端

ベルクシャと云ふ土地は、倫敦より三里餘り離れた處にあります。此處にゴスリンと申す者が旅籠屋を営み居ります。主人は名をゴスリンと呼んで歳五十許りであります。繁昌の家で近邊の者多く來つて酒食をしてゐました。時は四月頃のこと、一人の若者、道樂者と見えていなせな装で、若し御亭主四五日お世話になります。と云ひながら著てゐた齋合羽を脱ぎ捨て、鞆を投出し顔見合せ、若し御亭主は倫敦の人だね。若し十年前は倫敦に居ましたが、詰らぬことで多くの損失、身代限りになりました。此の田舎に引きました。若し身寄が倫敦に残つて居りますか。若しはい甥が一人ありましたが、悪い者共と交はり身持放埒、其上に人を殺せしとか、金を盗んだとか行方知れず、死んだと人は申しますが今にわかりませぬ。若しこの疵に覚えがありますか。若者肌押脱げば左の腕に見覚えのある刀傷。若しヤヤ其方は甥のランポールか。ラン伯父さん久しぶりだね。と云ひながらどつかと坐して、

ラン「ハウストールと兩人惡事をして、ハウストールは逃げ去り、我ばかり巡査に見咎められ、遂に傷まで受けましたが、久しく佛蘭西に行つて身を隠してゐたが、故郷なつかしく此の頃歸りましたが、ハウストールは此の近所にゐると聞いたが心當りはあるまいか。」「さア其人々運よくも此の山奥のキミナルハウスと云ふ寺の和尚になつて、いゝ女を引入れて、妻か妾かは知らないが、娘のゼネット諸共に好い暮しをしてゐると人の噂、其の女は故ある人の娘で、倫敦にも稀な美人だといふが、何者であらうか。ラン「それはハウストールの妾ではない、身人ある人の妾をかくまひ置くに違ひない、昔を云へば惡友である、和尚ぶつた面の皮、引剝いて遣るか金を取るか、是からその寺に行かう。この時歳の頃二十七八の男、亂れ髪で面色青ざめ、旅に窶れた衣服垢じみ、見る影もない姿だけれども氣高い生れ付、靴を提げて盛り出て、旅承はれば面白き其話、長旅で旅銀を失ひ難儀をいたす者、何がなと思ふ折から金になることならば、君の片腕になる程に、使つて下され、頼みます。と云へばランポール笑ひながら、ラン「君も道樂の果と見えた、同道するから來なされ。ゴスリンが「およしなさい。と止めるのを、旅「是非々々。と云つて連れだちキミナルハウスに出て行きました。ゴスリン獨語「今に性質は變らぬものか。斯くてランポー

ルは段々山に登ると、二十町ばかり、樹木繁茂して薄暗く、路は續々つゞいて寺あるを見ず。やうやく奥深く入れば、以前は大寺なれど破れ果て横倒れたる大門を入り、玄關にかかりおとづるゝに老人が出て来て、「どなた。」と云ふ。ランポール「私は倫敦で此方の和尚とは知合でありますランポールと申して下さい。」と荒々しげに云へば、男は驚いてかく告げると、ハウストール留守をつかふ。男は取次ぎに腹立つて、ラン「留守なら歸るまでお待ち申しませう。耳の遠い親父は奥に行つて申す、ハウ」是へと申せ。と立つ間もまたず入來るランポール、ラン「久しぶりですな、君にも變る事もなく、ことに此寺の御住職、身なりと申し、何不足なきこの有様、私もうれしい。どつかと坐し、巻煙草も匂ふ、酒の氣はいまだに失せぬ惡心の身持は表に現はれた。ハウ」七八年の間拜顔をしません、君のことは噂のみ、併しまだ病はとりきれぬ様子。ラン「死なねばなほらぬ性質故、いゝ正月も來ようかと、去年の暮から旅をかけ、このベルクシアに來て、ふと聞けば、君は今では教師となり、此の寺にゐて美人を圍ひ置くとの事、半口載せて貰はうと、草臥れた足でやうやく此の山寺まで來ました。ハウ」これは思ひもよらぬ、女とか美人とか圍つた覚えはない、世間の口を證にして、云ひがかりらしいこと云ふまいぞ、元は惡友に交はり不品行もした

が、今では改心して僧侶の身の上、貧者に恵をなし有餘る金もなし、君も今のうち身の立つやうにいたせ。というくの云ひわけをするにランポール聲を荒らげ、ラン七年前に二人で捕虜になつた其時に、君は其場をどろんと消え、私は一人かこまれ、危い所を脱れたが、いまだに残る腕の疵、暑さ寒さにしびれるも皆君から起つたこと、それを今更いゝ子振り、隠して一人儲けるは知合として頼み甲斐のないことでないか、まづ昔の誼みに一本吞ませよ。と云ふにハウストールもなだめながら持出す酒肴、その時玄關の處に待居る男はあたりに目をつけ、「これから這入れば庭口か。と差覗く其の處に、裾を引いて靜々と歩いて来る女の足音、男は帽子を眞深にして潛み居るともしら齒の娘、年は十九かはた知らぬ人目をいとふも夫の云附け守りて、去る二月の頃から忍び逢ふことも月に一度か二度三度、夫の来るに逢ふ世を待ちかねて、こゝに思はず端近く縁の際ふと明けながら、鳥影のさしたるはと樹の間の空を眺めぬる袖引いて、「これエミさん。と云へば、女は見かへり驚いて、「誰ですか、おふざけ遊ばすな。と振り拂ふを猶放たず、帽子をとつて「私ぢやツレスリンぢや。云はれて驚き逃げようとするを捕へて動かさず。ツレこゝな不孝者、大病の親を見捨てゝ惡人のワゝネーに欺かれ、かゝる深山の古寺に隠れ居るとは情ない、

幼少からいさゝか天地の道も教へ物の道理も知りながら、如何なる天魔が魅入つたか、思ひ直して家にかへり、親子に安心させて下さい。エミーとは一つ家で成長し、學問手習行儀まで教を受けたツレスリンの言葉に叛きかねたけれども、今末を契つた夫を捨て、黙つて此處を出ることならず、思案に餘つてゐましたが、やゝあつて胸を据ゑ、エミー「お父様の病氣も知つてゐますので、一度家へ歸らうと思ひながらも、夫の言葉も聞かぬうちに身儘にならぬは女の身の上、何事も夫に訊いて其上で兎も角も。ツレ「何、夫とは誰がことぢや、そなたと我とは幼きより親が許した許婚、それさへ反古になすのみならず、破れ武士のワーネーを夫と心得、守り居るは淺ましいそなたの心。と云はれてエミーは顔色を變へ、エミー「なにワーネーを夫とはけがらしい仰せ、我夫はワーネーのやうな下郎ではありません、世に疑ひない方。ツレス「誰だと云ふぞ。エミー「さア今はそのお名を申されませぬが、其夫の云ひ附故。ツレス「いや、やはりワーネーに欺かれて、かく云ふは惜しい、ともかくもお歸りなさい。エミー「いや／＼夫の言葉を聞くまでは、何のやうに仰有つても今は行かれぬ、放して下さい。ツレス「いや／＼放さぬ。と争ふうち、奥にはランポール聲荒らげ、ラン「惡僧め、くらへうそべえたこと云ふな、互ひに政府の規則を破り、重き仕置

になる身の上、姿を變へ、坊主になり、衣や袈裟でごまかしても、神佛が生れて出たら云は譯はあるめえ。ハウ「さアそんなに、事をわけ、相談づくにしよう」と云ふのに高聲しておどしても、つまる處は顔を立て、貴公を歸して遣るが、そこに話と云ふのは此寺に居る婦人といふは。と低聲になる折から庭の方で、女「あれえ。とばかり女の聲、二人驚き駆出して見るに、ランボールの連れて來た男、美女を捕へて行かうとするに、強淫をしようと心得、やう／＼引分け、女はハウストールが奥に連行き、跡に、ラン「かう、其方は不法な事をするぢやねえか、今話のつきかゝる處を邪魔をしちや困る、先へ歸れ。」と突退けるに、ツレスリンは顔色蒼ざめ、一人す／＼と歸る道、日は暮かゝるに樹木は茂り、行先分らず山道を踏迷うて北に行けば、柵で堅めた官門があります。押せど締りは堅くして容易にあかぬことなれば、如何にせんと、佇む折から、奥より來る武士一人、見とがめられじ、と道に下り木の間にひそめば、此の武士は合鍵にて錠をあけ、門を開き出で來た姿を見れば、こは如何に、エミーを盗み出した悪人ワリーネーでありませう。ツレスリンは悦んで、ワリーネーの前に行くを後から鑑を捕へ、ツレス「ワリーネー待て。と呼ぶ聲に驚き見返り、ワリーネー前はツレスリン、何用あつてとどめたか。ツレス「何事とはしら／＼しいその言葉、エミー

を返せ、とく渡せ。ワーネ「エミーとは誰の事だ、己は知らない。ツレス」よし、まだくそ
んなことを云ふか、何月の初より此寺に圍ひ置いたか、隠し立せば用捨はないぞ。ワーネ「何
を申すとも己は知らない、覺えないと云へば何とする。ツレス」かうしてくれる。と胸倉と
れば振拂ひ、ワーネは一刀を抜けば此方も抜合せ、切りかけては受流し、暫くは戦ふ龍
虎の争。刀を捨てゝ組合ふ折から、其物音にランポールとハウストール、此處へ驅來る折
から、ワーネを組伏せて突かんとする手をランポール確かと捕へて動かさず、雙方引分
けて、ランポールはツレスリンに向ひ、ラン「其方にも旨え汁を吸はせようと思ひの外の亂
暴狼藉、呆れ果てたる人だ、とくく歸れ。と云ひこらし、深き仔細は白刃を拾ひ、ほこ
りを拂ひて鞘に納めさせなどして、懷中より金少々出し、ラン「これを持つて宿に歸り、一
杯呑んで寝るがいゝ。と云ふに、ツレスリンは何事も申さず、下郎に打明けがたき我が身
の上、是非なく山をぞ下つて宿に歸りました。後にはランポールをワーネに引寄せ、ワ
ーネ「抱へにして遣はすから、只今の男は我主人を窺ふ者だから、人知れず奉公の手始に殺
してくれよ。との願ひにランポールは得心して、二度跡をつけて宿へかへりました。

第二回 英國の噺附リース公とエミーの情事

今を去ること四百年以前、女王でイリザベスと云ふ智勇の人がありました。西班牙の軍が果てた後、舊宗寺キミナルハウスに士族ロブサルドの娘エミーを連出してかくまひ置く人は、其頃女王にお覺えめでたき上等官員のリーストル公であります。其家老役にワーネーと申す惡智の人がありまして、此寺に隠し置いた寺和尚、娘にゼネットと云ふがありました。親父も取る歲故とかく不行届におはすらん、ことに此事が知れます時は、どのやうに成りますことやら案じられます。エミー「私の父上は此程病氣で、迎へに來たものがありましたけれど、行くことならぬ此の身の不幸、さぞあん嘆きであります。と心配してゐる處へワーネー現はれ、ワーネー「エミーさんにはツレスリンにお逢ひなられたでせう。エミー「お父様の病故是非々々お歸りをと迎へに來ましたものを、情なく歸したが心がかりでございます。ワーネー「殿様のお名を明して仰有るまいな。エミー「なんの明してよいものか、今日殿様お出があらば、親の重病故、お暇を賜はつて一度歸つて父の見送りを済して歸りたうございます。と云ふ。ワーネー「それはお宜しくはござりませぬ、ツレスリンと云ふ許婚

があることを殿に申すは悪う御座ります、殿にはツレスリンが迎へに來たこと、君が逢はれたと云はれなさるな。エミー「いえ、殿様へは申上る心でござんす、そんなことで御立腹なされる御前様ではござりません。マナーそれは宜しうござりませぬ、きつと仰しやらぬ方が宜しうございます。その時馬の足音がしたので出迎へれば、リイストル公は立派な衣裳でお入りになる。御居間に通る。エミーお祝ひ申上げ御機嫌をとつて、上衣の釦をとり、衣服をぬがせながら見とれて思はず、エミー「御服の飾と申し、この美しいお姿を見まわらすは冥加の至り。リイス公笑ひながら、公「錦で包んでも、瓦で作つた玉ではつまらぬことですな。エミー「あなた様のお姿は瑠璃の玉を錦で包んだ様でござります。と睦まじく語るを、次の間でマナー聞えるやうに小聲で、マナー「我君のやうな御人はありません、又雛を一對並べたやうです、どうぞ早く雲霧晴れ、御夫婦にお成りなさるやうに致したいものぢや。とつぶやく。リイストル公は「明朝はウードストツクに行かねばならぬ。などと話してゐます。公「ツツセツクス公の身内でツレスリンはエミーの許婚であります、こゝに隠れぬることを知つてたづねて來はせぬかと心にかゝることです。エミー「もしもやツレスリンが此處に來れば、君は何と思召なされるか、又私を連れ歸らうとなされたならば、何

うなされるか。リーストル公は短刀を出して、公「この目貫に眠熊がある、この熊よく眠り知らねば猫のやうである、もし人が来て邪魔をなし眠を覺せば、忽ち怒つてこの如し。と短刀拔放して「切つて捨る。と云へば、エミー驚いて顔色變じて倒れたので、リーストル公いたはつて、公「何うかせられたか。と藥を吞ませなどする。やう／＼に心をさまり、エミー「此程から不快で、ゼネットに大變世話になり、親身も及ばぬ介抱をうけました。リーストル公は指輪と多分の金を賜ふ。これから廣間に出る。リーネ「御名代の大役御心痛お察し申上げます、ウードストツクへ御出發の用意がと／＼のひました。リ公は心残り、公「宮中の勤何かと心痛し、事のみ多く、早く世を逃れて海邊山谷風景を眺め、花鳥を友として暮したいものぢやな。リーネ「君は濱邊で、エミーどのと貝殻でも拾ふがよい。と低聲で云ふ。公「何だ。リーネ「君が役を引きなされて、濱邊のお住居をなされる時は、わたし達も鋤鋤をと、或は濱邊で貝殻を拾ひますより外はないと思ひます。と云ひ紛らす。リーストル公は苦笑ひして馬に乗り、後に心を殘して出て行きます。跡でリーネ「殿もエミーどのを殘してお出でなさるにはさぞ察しられる、あのやうな心では案じられることだ。と獨言。ツレスリンは宿に歸つて寝る。深夜に忍び來る者があります。宿屋の亭主でござります。亭「あ

なたさまは此甥と一緒に居られることが危うござります、早く此の場を逃れなされ、裏口に馬が一頭ござります、裏道に出て南にさして行きますと間道があります、早く早く。と急きます。ツレスリン悦び、ツレス「實はキミナルハウスの寺に女一人かくまつてある、その女の身上の何うなるか見届けて下されば御禮は厚く申します。と指輪を取交せ、金子の手當をして歸りました。ロブサルドの娘が親の病氣のことを深く申し立出ましたに、夜は未だ明けやらず、闇難所を行くこと四五里ばかり、夜は明けたれど人家見えず、やうやう二里ばかり行けば、一軒の酒店があります、これに休む。馬の足にはめた鐵がとれたので鍛冶屋をさがしたがるません。折から来る十一歳ばかりの小僧。小此の邊に鍛冶屋はなし、今少先にあります、私が知つてゐますから御案内いたしませう、お金を下さい。ツレス「それ遣はすから連れて行つてくれ。小僧は先に立つて行く事十四五町ばかり、人家離れた原であります。ツレス「足が勞れた、何處まで行くのか。小も少しでございます。又四五町ゆけば左右山で蘆茂り物凄いの所である。その小僧の面體は只者ならず、ツレスリン立止り、ツレス「やい小僧、何處迄行くのだ、お前は怪しいものだ。云ひながら掴みかゝらうとすれば小僧逃出す、その足の速いこと人間技ではない。「さてこそ怪物。と猶駈るに

小僧早くも山の峯に登り、その手を打つて笑ふ。身體疲れてツレスリン追ふことが出来ず。此時小僧、「今少し行けばつきます、金を多く下さい。ツレス、金を上げよう、どこだ。」
「この茂つた林に待ちなされ。」と云つて下り来て、「小」目をふさいで待ちなさい。眼を閉ぢてゐるうちに後の方から一人の僧、黒く髪を振り亂し、面體は異人の如くに、脊をコツコツとたゝいて直しあたへる折、飛かゝつて刃物振上げ、ツレス、怪しの者動くまいぞ。と云ひくツレスリン切つてかゝれば、異人面をとつて兩手を土に突き、「恐入りました、私は魔者ではござりませぬ、このやうな事をしてその日を渡る者でござります、命は助けて下さい。」と云ひながら顔見合せ、男「ツレスリン様ではござりませんか。ツレス」あゝ、ウエランドであつたか。ウ「思ひがけなき御對面、御無事でよいでなされましたか、私鍛冶職でありました時放埒で家を失ひ、君の家に三ヶ年恵みをうけし大恩あり、若氣の至り家出なし、手づま使ひの旅かせぎ、諸國を巡廻して三年以前、此處アラスコと云ふ醫師のもとにゐます、アラスコは仙人のやうで難儀を治し、人を殺す術があります、天文地理を計り妙薬を調合するから其術を受けたく、手づまの種が今は又、妙術を傳授して従つてゐますと、お上から怪しい醫者だとのお咎めで師はこゝに居らず姿を隠しました、この裏山の裾

に一つの穴があります、このイカルトと申す小僧と二人留守を守るも、萬一事があらはれたら火をかけるときに、一時にこの穴の中の器械を焼失ふ爲に残されてます、君にはどうしたことで山中に來ましたのか。ツレス深いことは云へない、我が恩人の病が重く、一人の娘は悪人に連出され行方知れず、たづね出して安心させたく、やう／＼娘の在所は知れたが、多人數の者に支へられ、一命も危い處を宿の亭主の情でこれまで落延びた。と事のあらましを物語れば、ウ「その恩人の重病は私全快おさせ申しませう、まづ御同行。とイカルトに囁やき、ツレスリンの先に立ち、道の案内にやう／＼と十六七町來る頃、天地も割れる物音に、ツレスリン驚き、ツレス「何事だ。ウ「あれは小僧が後で火をかけたので、一時に穴の中の家具、地雷火が爲に破裂したのです。

第三回 ツレスリンの結婚エミーの事

これから馬のある處に來て馬に乗つて、兩人はリドホルのロブサルドの屋敷に歸りました。此地は毛物を獵する山の麓で、屋敷も今は古く、土塀破れ、周圍に古い堀がある。樹木に蔦柱まつはり、見るもいぶせき古屋敷、門を入り玄關から入口を見て老僕ミルク嬉